市報 ぎょうだ
No. 849
平成29年3月1日 発行

# 行田 歴史系譜 276

## 歴史を語るこの〝いっぴん〟 ～博物館の収蔵庫から～ 12

### 忍藩主松平家家臣の当世具足

行田市郷土博物館所蔵

15世紀後半から始まる戦国時代は、合戦に用いる武器や武具に大きな変革をもたらしました。中でも甲冑は、戦闘の増加に伴う大量生産の必要から、製作技法の簡素化が進みました。一方で兜や胴、肩から上腕部を保護する袖に加えて、顔面を保護する面類、二の腕を保護する籠手、太腿を保護する佩盾、膝頭から下を保護する臑当が付くようになりました。胴には蝶番が用いられ着脱しやすくなり、とじる紐の間隔も空けられるなど、機動性も向上しました。このように、製作の簡素化が進むとともに防御性や機動性が向上した甲冑のことを、江戸時代の人々は当世具足と呼びました。

写真の甲冑は松平家家臣伊藤家に伝来した当世具足です。甲冑の名前はそれぞれの製作技法や特徴などから命名します。この甲冑でまず目に付くのが、全体に黒漆が塗られていることです。兜や胴の素材には鉄板が用いられています。胴は横長の黒漆の鉄板を納戸色の紐で間隔を空けてつないでいます。この技法を素懸縅といいます。さらに、胴の左脇に蝶番があり前後に開くようになっています。この形式の胴を二枚胴といいます。これらの特徴をつなげて、この甲冑は「鉄板黒漆塗納戸糸素懸縅二枚胴具足」と命名されました。

太平の世が続いた江戸時代にあって、甲冑が実戦で用いられる機会はほとんどありませんでした。しかし、甲冑は武家のシンボルであり、伊藤家でも正月五日に具足鏡披を行っていました。天保8年（1837）の同家の年中行事を記録した「当家歳中行司」によれば、甲冑に餅や酒を供え、当主は麻裃を着用して脇差しを差し、杯を当主から順に使用人まで回すという祝い事を行っていました。

戦場で着用する機会がなかったとしても、甲冑は武家の精神的な支柱の一つとなっていたのです。

（郷土博物館　鈴木紀三雄）

鉄板黒漆塗納戸糸素懸縅二枚胴具足

## 特定非営利活動法人 行田結婚支援センター

## つながる ひろがる みんなのチカラ ～市民公益活動団体紹介～③

平成19年12月に発足し、結婚を希望する人同士の出会いや交流をサポートしているのが特定非営利活動法人行田結婚支援センターです。

同法人は、定期相談や婚活イベント、小規模お見合いを中心とした結婚支援をしています。年3、4回開催される婚活イベントでは、街歩きや自分磨き講座などを盛り込み、参加者同士が打ち解けやすいよう内容を工夫。毎回50人近くの参加があり、多くのカップルが成立しているそうです。他にも相談者からの要望を受け、高い年齢の方を対象にしたイベントの開催や1対1のお見合いも行っています。

晩婚化が進み、出会いの機会が減り社会的に孤立してしまう人も多い中、活動の意義を強く感じているという同法人。今後は街おこしにも関わりながら、親を対象にした相談会や他の市民公益活動団体と連携したイベントなども行っていきたいと考えているそうです。

【代表理事】智田 輝史　【電話番号】090－2416－9692（野村）

イベントの様子

**今月の表紙**　2月3日、行田にある行田八幡神社で「節分祭豆まき」が催されました。

年男・年女の他にも追手風部屋の大奄美関らが参加。社殿から「鬼は外、福は内」という威勢の良い掛け声とともに当たり券が入った福豆をまくと、詰めかけた人たちは一斉に手を伸ばし、笑顔で受け取っていました。

■市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。

■市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。

■市報をデイジー版に録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。

VEGETABLE OIL INK
環境にやさしい植物油インキ
市報ぎょうだは再生紙を使用しています

■編集・発行／行田市総合政策部広報広聴課
〒361－8601 行田市本丸2番5号
TEL 556－1111 FAX 550－2116